

JACET-Kanto Newsletter

一般社団法人大学英語教育学会関東支部

March 31, 2019 No.12

JACET 関東支部ニューズレター第 12 号 (WEB 版) 刊行に寄せて

(御礼と退任のご挨拶)

支部長 木村松雄 (青山学院大学)

JACET 関東支部ニューズレター (WEB 版第 12 号) をお届け致します。編集の労をお取り下さった関東支部ニューズレター委員会委員長の佐野富士子先生 (常葉大学) と副委員長の下山幸成先生 (東洋学園大学)、そして編集委員の齋藤早苗先生 (東海大学)、川口恵子先生 (芝浦工業大学)、長田恵理先生 (國學院大學) に衷心より御礼申し上げます。御存知の通り、2013 年度より学術研究発表は、「関東支部紀要」(*JACET-KANTO Journal*) (委員長: 伊東弥香先生 (東海大学)、副委員長: 今井光子先生 (玉川大学)) に掲載し、支部活動報告全般に関しては本「ニューズレター (WEB 版)」(年 2 回発行) に掲載してきました。「紀要」と「ニューズレタ

ー」は車の両輪の如くそれぞれの責任を果たしながら相互補完的な関係を維持し関東支部の重要なメディアとして機能しています。本号は 2018 年度の第 2 回目 (通算第 12 回目) のニューズレターとなります。

さて、御存知の通り、英語は既に国際的な共通語 (ELF) として認知され一部を除き世界中で使用されています。また外国語 (英語教育) は、国際化・グローバル化の名の下、国際基準 (CEFR: ヨーロッパ言語共通参照枠) に基づいて行うことが一般化され、新学習指導要領 (2020 年施行) の骨格を支えるものとなっています。またこれより初等英語教育が本格化し、外国語 (英語) 教育は、小・中・高・大を一貫した系統的な一貫教育

目次

・巻頭言

支部長 木村松雄..... - 1 -

・第 2 回支部総会報告

支部事務局幹事 高木亜希子..... - 3 -

・月例研究会報告

月例研究会委員長 山本成代
月例研究会副委員長 奥切恵..... - 4 -

・青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会報告

支部研究企画委員 飯田敦史
支部研究企画委員 辻るりこ
支部研究企画委員 菊池尚代.....

- 5 -

・支部研究会活動報告 (2018 年度)

各研究会代表..... - 8 -

・支部大会運営委員会からのお知らせ

支部大会運営委員長 新井巧磨..... - 16 -

・支部紀要編集委員会からのお知らせ

支部紀要編集委員長 伊東弥香..... - 16 -

・事務局だより

支部事務局幹事 高木亜希子..... - 17 -

システムの中で行われようとしています。大学における教員養成も「コアカリキュラム」の理念に基づいた包括的且つ具体的な成果を期待する内容に変わろうとしています。

さらに、学習そのものは、メタ認知方略 (Metacognitive Strategy) を駆使した RPDCA (=Research-Plan-Do-Check and Action) サイクルを基調とする行動目標解決型のアクティブな活動として位置づけられ、学習者は指標としての到達目標を CAN-DO リストによって、省察し、自己調整を図りながら、自律した存在としての学習者 (autonomous learner) へと成長することが期待されています。一方で、学習者を導き支援する教師も、自らの機能と役割を J-POSTL 等を指標として省察することで、教師として成長することが期待されています。電子化された教材を電子黒板とタブレットを用いて学習する「双方向・課題解決型学習行為」は教室の外との異文化間交流をも可能とし、AI や AR の進捗によりさらに加速することが予測されています。AI による自動翻訳は、いずれ劇的に進化した場合、人の心を読み取り深い思想も伝達できるようになるかもしれないと言われます。今後、AI の能力が人間を超える特異点を意味する「シンギュラリティ」は本当に顕在化するかも知れないとも言われます。英語の 4 技能測定、特にスピーキング能力測定を可能にするのは AI の進捗に拠るところが大きくなっていくのではないのでしょうか。

このような高速で変化する社会環境の中で、教育、特に外国語 (英語) 教育の在り方も、従来の「教師中心主義 (teacher-centered)」対「学習者中心主義 (learner-centered)」といった 2 項対立型論理モデルでは説明ができなくなってきました。これ以降は、学習そのものが中心となる「学習中心主義 (learning-centered)」の時代にシフトし創造する新たな学習モデルの中で機能する教師の役割と学習者の役割が論じられることになるのではないのでしょうか。2017 年第 56 回

JACET 国際大会 (於青山学院大学) 開催時に於ける関東支部特別企画「学習とは？」の基調講演とシンポジウムにおいて、AL (Active Learning) の研究者である溝上慎一氏 (京都大学教授) は、学習の「外化」の重要性を特に強調されていました。AL に象徴される学習中心主義の目標を敢えて一つに絞り込むなら、「外化を通しての課題解決能力の育成」と言えるでしょう。今後 AI の進捗は、人間の能力との対立軸として見る限りは脅威であり続けるかもしれませんが、AI の進捗を生かした新たな創造を人間が主導するのであれば恐れるには足りないかもしれません。しかしそのためには、TESOL や英語教育学の範疇内での研究のみならず関連諸科学との共同研究や横断的なテーマがさらに必要になるのではないのでしょうか。「学」「産」「官」のそれぞれの強みと課題を共有しこれを発展させ、社会の課題に応える新たな研究組織体が必要になってきていると思います。JACET が、特に JACET 関東支部が先を見据えて、率先してその任を果たしてくれることを期待しています。

さて、私事となりますが、3 期 (計 7 年) 務めさせて頂いた JACET 関東支部支部長の職を任期満了に伴い 2019 年 6 月の社員総会をもって辞することとなりました。この間を含め、名誉会長の小池生夫先生、会長の田辺洋二先生、森住衛先生、神保尚武先生、そして現会長の寺内一先生と現 JACET 本部執行部の先生方と事務局の皆様にはご指導を賜り誠に有難うございました。また 6 支部の支部長職に在られた支部長の先生方と賛助会員の皆様にも御礼申し上げます。最後に、この 7 年間支部運営全般においてご尽力下さった現執行部の先生方をご紹介しその労を少しでも労えればと思います。副支部長 (笹島茂先生：東洋英和女学院大学)、副支部長 (藤尾美佐先生：東洋大学)、支部事務局幹事 (高木亜希子先生：青山学院大学)、支部幹事 (山口高領先生：立教女学院短期大学)、同 (伊東弥香先生：東海大学)、同

(奥切恵先生：聖心女子大学)、同(新井巧磨先生：早稲田大学)、同(山本成代先生：創価女子短期大学)、同(飯田敦史先生：群馬大学)。次年度(2019年度)よりの新執行は、以下の方々により執り行われます。第4代支部長：藤尾美佐先生(東洋大学)、副支部長：山口高領先生(立教女学院短期大学)、支部事務局幹事：奥切恵先生(聖心女子大学)。(幹事、その他の役職は新体制において公表される予定です)。

藤尾新支部長の再配の下、JACET 関東支部がさらに発展し、社会の負託に応える学会として成長することを心から祈っております。

会員の皆様、長い間、お世話になりありがとうございました。健康に留意しさらにご活躍されますよう衷心よりお祈り申し上げます。

第2回支部総会報告

支部事務局幹事

高木亜希子(青山学院大学)

2018年11月10日(土)に、青山学院女子短期大学南校舎2階S201教室に於いて、2018年度第2回支部総会が開催されました。支部総会では、2019年度の事業計画、予算案、支部人事の報告と承認が行われました。以下に内容を記載いたします(なお、予算案は省略)。

■2019年度事業計画■

I. 大会、セミナー等の開催(1号事業)

(1) 支部大会の開催

名称：平成31(2019)年度関東支部大会

日時：2019年7月7日

場所：東洋大学

規模：350名

(2) 支部講演会の開催

名称：JACET 関東支部講演会

日時：2019年5月11日、6月8日、10月12日

の3回を予定

場所：東洋大学

内容：

- ・英語教育及び関連する分野にて、現在活躍中の研究者達による、最新の研究成果や知見を発表する講演会を定期的実施する。
- ・英語教育をより実践に結びつけるため、実業界で英語コミュニケーションに携わっている専門家にも、講演を依頼する。

規模：毎回約50名

(2) 支部共催講演会の開催

名称：JACET 関東支部・東洋大学共催英語教育講演会

日時：2019年4月13日、9月14日、11月9日、12月14日、2020年1月18日の5回を予定

場所：東洋大学

内容：

- ・英語教育及び関連する分野にて、現在活躍中の研究者達による、最新の研究成果や知見を発表する講演会を定期的実施する。
- ・英語教育をより実践に結びつけるため、実業界で英語コミュニケーションに携わっている専門家にも、講演を依頼する。

規模：毎回約50名

II. 『紀要』『支部ニューズレター』等の出版物の刊行(2号事業)

(1) 『JACET 関東支部紀要』第7号(英語名：*JACET-KANTO Journal*)

日時：2020年3月31日

規模：約1,100冊

(2) 「JACET 関東支部ニューズレター」第13・14号

日時：2019年9月30日、2020年3月31日の2回を予定

規模：JACET 関東支部 HP に pdf として掲載

Ⅲ. その他 (5号事業)

(1) 支部総会の開催

名称：2019年度第1回、第2回関東支部総会

日時：①2019年7月7日

②2019年11月9日

場所：東洋大学

目的：①2018年度の関東支部の事業、会計報告、および2019年度の関東支部の事業計画、予算案および人事案を示す。

②2020年度の関東支部の事業計画、予算案および人事案を示す。

(2) 支部役員会の開催

名称：関東支部運営会議

日時：2019年4月13日、5月11日、6月8日、9月14日、10月12日、11月9日、12月14日、2020年1月11日、3月14日を予定

場所：東洋大学

目的：支部の運営における審議、計画の立案

■2019年度支部人事■

支部長：(2019年6月定時社員総会迄)

(現在の支部長) 木村松雄

(2019年6月定時社員総会後～2021年6月迄)

藤尾美佐

副支部長：山口高領

支部事務局幹事：奥切恵

支部幹事：新井巧磨、鈴木彩子、山本成代

支部会計担当者：辻りこ、中竹真依子

支部研究企画委員：

青木理香、新井巧磨、伊藤泰子、今井光子、上田倫史、遠藤雪枝、大野秀樹、大矢政徳、奥切恵、長田恵理、大和田和治、小張敬之、清田洋一、熊澤孝昭、河内山晶子、菊池尚代、小屋多恵子、荊紅滄、斎藤早苗、酒井志延、佐竹由帆、佐藤健、佐野富士子、下山幸成、鈴木彩子、鈴木健太郎、関戸冬彦、田口悦男、武田礼子、多田豪、辻りこ、寺内正典、中竹真依子、中山夏恵、濱田彰、

藤尾美佐、武藤克彦、山口高領、山本成代、米山明日香、渡辺彰子、Brian Wistner、Paul McBride

月例研究会報告

月例研究委員会委員長

山本成代 (創価女子短期大学)

月例研究委員会副委員長

奥切恵 (聖心女子大学)

■2018年度下半期活動報告■

2018年度下半期は、10月13日(土)に東京大学大学院総合文化研究科・教養学部教授のトム・ガリー先生をお招きし、「今後の悉皆英語教育」というタイトルでご講演いただいた。なぜ英語を学ぶのか、そして教えるのか、という英語教育の核心に迫り、活発な質疑応答も交わされた。講演内容に関しては後述の月例研究会10月報告参照。

■2019年度上半期活動計画■

2019年度上半期は、以下のように各先生方にご発表をお願いする。東洋大学にて16:00~17:20開催予定。

・5月11日(土) 村上加代子先生 (甲南女子大学人間科学部)

・6月8日(土) 西川千春先生 (公財 笹川スポーツ財団特別研究員・明治大学経営学部)

*2019年度より、月例研究会は「支部講演会」に名称を変更する。

(山本成代・創価女子短期大学)

■月例研究会10月報告■

日時：2018年10月13日(土) 16:00~17:20

場所：聖心女子大学聖心グローバルプラザ

(4号館) 2階 4-2教室

題目：「今後の悉皆英語教育」

講師：トム・ガリー (Tom Gally) (東京大学)

本講演では、日本の社会において英語使用の必

要性がかなり限定されているにも関わらず、初等中等教育と高等教育においてもほぼ全ての子どもたちが英語を学ばなければならないことについての正当化にかかわる問題点に、歴史的視点、政治的視点、及び教育的視点から、真っ向から議論された。

AIの台頭により、Google Translate等の機械翻訳も精度が高くなってきており、旅行やビジネスの一部は機械翻訳で事足りるケースも増えてきた。こういう時代に何のために英語を学習するのか、学習者や言語教育者にとって再考する時代となっている。講演では、学習者にとっての英語学習の主たる動機づけとして、実用性と教養の二つがあげられ、さらに歴史的に外国語教育は英語教育が主に実施されてきているという事実により、継続的に英語中心の外国語教育となっている状況も詳細に説明された。日本では100年近く前から本格的に開始された英語教育も、学習者の動機づけや教育による学習結果は、その頃からさほど変わらないのにも関わらず、英語が中心に行われている。

政治的・経済的活動においても英語がグローバル言語として機能しているという状況も重なり、学習指導要領においても外国語教育については殆どが英語教育に特化して記述・説明されており、教育現場では英語が中心となっている。機械翻訳が飛躍的な発達を遂げる中、今後は子どもたちの英語学習における動機として実用の必要性が弱くなるが、教養を高めるという目的は変わらないはずだ。しかし、悉皆学習の正当化が教養を高めることにシフトすると、対象の言語を英語に限定する根拠がなくなる。

聴衆からも意見が出され、講演後もたくさんの質問があり、活発な講演会となった。

(奥切恵・聖心女子大学)

青山学院英語教育研究センター・JACET

関東支部共催講演会報告

飯田敦史（群馬大学）

辻りこ（神田外語大学）

菊池尚代（青山学院大学）

■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会（第3回）■

日時：2018年11月10日（土）16:00～17:30

場所：青山学院女子短期大学南校舎階 S201 教室

題目：「高校生の英語はどのように伸びるのか」

講師：片桐一彦（専修大学）

本講演は、「高校生の英語はどのように伸びるのか」と題し、講演者がこれまでに取り組んできた4つの実証研究に焦点を当てながら、高校生と英語力の関連性について報告がなされた。これまでの先行研究では、中学生を対象に実施した研究が多く、高校生を対象とした英語力伸長に関する実証研究は非常に限られていた。そこで、ある県立高校に通う252名（普通科で学習する213名、英語コースに在籍する39名）を対象に入学から卒業までの3年間に渡り縦断的に、語彙力、リスニング力、リーディング力、そしてスピーキング力を測定する研究を実施した。

1つ目の研究では、受容語彙サイズの伸び方を調査した。いわゆる進学校という教育環境においても、普通科に在籍する63.9%の生徒が2年生時に、42.2%の生徒が3年生時に語彙力の伸長が見られなかった。リスニング力とリーディング力を測定した2つ目の研究では、進学校でも1年という限られた時間では生徒の英語力伸長は見られなかったこと、リスニング・リーディングの両方のスコアから様々な上達のパターンが見られたこと、リスニング得点の伸びは1回目（入学直後）の得点に、またリーディング得点の伸びも1回目の得点と関係している可能性があることが明らかになった。3つ目の研究では、「流暢さ」、「正確

さ」、「統語的複雑さ」、「語彙的複雑さ」の観点から英語科 39 名のスピーキング力の伸長を検証した。分析結果から、スピーキングは流暢さが最初に伸び、次に正確さが伸びることが明確になった。流暢さの伸びは、先行研究からも同様の傾向が見られたが、正確さはコンテキストによって異なるようであった。4つ目の研究では、英語科 39 名の上記の4つの能力の伸びが検証された。分析結果から、受容語彙サイズの伸びは全ての生徒に見られ、リスニングは約 70%の学生に、リーディングは約 95%の学生に、スピーキングに関しては約 50%の学生に伸びの傾向が見られた。また、スピーキング力の伸びには生徒間で様々なパターンが見られたが、「流暢さ」、「正確さ」、「統語的複雑さ」、「語彙的複雑さ」のすべての項目で伸びが見られたのは 10.3%の生徒のみであった。

本講演では、進学校に通う高校生でも3年間を通して、英語力を年々、着実に伸ばしていくことが難しいことが報告された。個人差の問題はもちろんのこと、中だるみという要因も今回の研究結果に大きく影響しているようであった。講演中、聴衆からスピーキング力の「複雑さ」の計測方法、早期英語教育経験の有無と英語力伸長との関係性、データ収集の場となった県立高校の教育環境に関する質問が挙がり、高校生の英語力伸長に対する関心の高さが窺える講演会となった。なお、本講演で紹介された4つの研究論文は、オンライン上でダウンロードが可能である。

Katagiri, K. (2009). A three-year longitudinal study of vocabulary size in Japanese SHS students and a description of their developmental patterns. *ARELE*, 20, 131-140.

Katagiri, K. (2010). Three-year longitudinal study of the progress in listening and reading proficiency of Japanese senior high school students and their developmental patterns. *ARELE*, 21, 221-230.

Katagiri, K. (2013). Progress of vocabulary size and listening, reading, and speaking proficiencies among Japanese high school EFL students over a three-year period. *The JLTA Journal*, 16, 127-146.

Koizumi, R., & Katagiri, K. (2009). Changes in speaking performance of Japanese high school students: Longitudinal and cross-sectional studies at a SELHi. *ARELE*, 20, 51-60.

(飯田敦史・群馬大学)

■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会（第4回）報告■

日時：2018年12月8日（土）16:00～17:30

場所：青山学院大学 14号館 9階 第16会議室

題目：「大学における通訳・翻訳指導理論と実践のギャップをどう埋めるか」

講師：田中深雪（青山学院大学）

現在、幾つかの大学では、通訳・翻訳指導を実践しているところがあるが、多くの場で直面する課題は、通訳学・翻訳学の理論と実践の溝をどう埋めるかである。本講演では、まず初めに、翻訳学と通訳学の概説を頂き、その上で先行研究をもとに、理論の必要性についてお話頂いた。さらにその指導実践例として青山学院大学での取り組みについて報告された。

田中氏によると、目標としているのは、通訳学、翻訳業務をこなせるだけの実力の習得とのことであるが、実際のところ、学んだ理論を実践の場で使わないと、講義と実践の場が乖離しているということがあるとのことである。その点に関し Gile (2001, 2016)では、理論を学ぶことは明白な指針として利用できる中心的な概念を発展させ、形作るのに役立つと明記されていることが示された。

しかしながら、その理論の実践的な指導において、学生の理解をどう促し、翻訳実践に意味を持つよう理論的概念を提示するのが課題とのことである。その点に対し、通訳と翻訳に関して知識を深め、理論的概念を考察する目的とする青山学院の授業やゼミでの取り組みは多くのヒントを与えると考えられる。田中氏によると、翻訳ワークショップを実施した結果、学生自身が翻訳するときに自信がつくと回答したことや、なぜそのように翻訳したのかという理由が具体的になること、そして他者の翻訳を観察することでチェックする方法を学べたなど、多くの利点が報告された。また、ゼミの学生らは、グループでテーマを決め、予測、分担、分析、リサーチ、発表という過程を通し、理論的概念の理解と実践を結びつけた学びに取り組んでいるとのことである。例えば、日本の人気漫画「ナルト」における訳出の特徴を分析したりと多岐に渡る。

今後、このような通訳・翻訳指導において、理論の導入は必要とのことであるが、今後も議論が必要ということが明示された。最後には、Google翻訳のことや具体的な指導実践、先行研究に関することなど活発な質疑応答が繰り返され、会場が最後まで活気に溢れた講演会となった。

(辻りこ・神田外語大学)

■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会（第5回）■

日時：2019年1月12日（土）16:00～17:30

場所：青山学院大学14号館（総研ビル）

題目：「非言語コミュニケーションと英語教育」

講師：野邊修一（青山学院大学）

人間のコミュニケーションに関する、学際的、融合的な学問である「非言語コミュニケーション」研究と、その領域が英語教育でどう扱われているのかに関する分析や先生のご助言も含め、大変重要なご講演であった。まず、非言語コミュニ

ケーション研究で扱う対象には、顔・表情、視線、身振り、姿勢、空間や接触などの非言語非音声情報と、声の高低・大小やイントネーション、話速などの非言語音声情報があり、文化との関わりが深いことなどをご説明くださった。しかし、外国語・英語科の新学習指導要領等（小・中・高）では、これらの扱いが限られているとのこと指摘には驚かされた。特に「気持ち」などを「話して伝え合うやりとり」や「話して伝えること」などの文言は繰り返し出てくるが、その「気持ちを伝える」言語の働きの例として、「礼を言う」「褒める」「謝る」が小学校の新学習指導要領等では先行して示され、人間の基本感情の一つである「驚き」の例示は、実は高校1年からというのだ。さらに、高等学校の新学習指導要領等では、ジェスチャー、表情、アイコンタクトなどに関する具体的記述がほぼなくなり、学ぶ機会が激減するかもしれないとの先生のご指摘には危惧の念さえ抱く。体の動きが比較的小さく、少ない日本人独特のコミュニケーションの影響とのことだが、グローバル化が叫ばれて久しい。世界共通語としての英語が盛んに研究される中、表情や身振りなどの意義や重要性などを、英語教育の中でも明示していくべきだ。加えて、先生のゼミでは就職活動での面接選考における非言語情報の大切さなど、学生にとって実践的な内容も扱っていらっしやるとのことである。コミュニケーションは言語に限ったことではない。むしろ、コミュニケーションがうまくできない人は、表情や身振りを含めた体の動き、そして声に抑揚がない場合が多く、相手に気持ちが伝わりにくい。極めて有益なご講演だった。

(菊池尚代・青山学院大学)

支部研究会活動報告（2018年度）

各研究会代表

■教育問題研究会■

代表：清田洋一

2018年度の研究会活動報告

研究会の中心的研究テーマ

- ・『言語教師のポートフォリオ』【小学校英語教師編】の開発
- ・J-POSTL 活用事例の研究
- ・外国語学習における異文化理解教育
- ・小学校英語教育の研究
- ・『言語学習ポートフォリオ』の開発

上記をテーマに、日常的な活動として、研究会活動打ち合わせ会議を年8～10回開催した。このほかに、会の主催の講演会やシンポジウムを行った。特に、研究会の最も大きな研究大会として「言語教育エキスポ2018：2018年3月4日（日）」を主催した。

研究成果の報告として、紙媒体とオンライン（print edition ISSN: 2188-8256/online edition ISSN: 2188-8264）研究会会誌『Language Teacher Education 言語教師教育』2018 Vol.5 No.2（2018年8月）、Vol. 6 No.1（2019年3月）を発行した。内容は、J-POSTL の活用方法に関する論文、実践報告、および、その関連領域に関する論文、研究ノート、実践報告、特別記録、書評などとなっている。

2019年度上半期の研究会活動計画

- ・研究テーマ：2018年度のテーマに継続的に取り組む予定
- ・研究発表予定：J-POSTL を活用した英語教師教育、外国語学習における異文化理解教育、小学校英語教育の研究など
- ・研究会会誌の発行『Language Teacher Education 言語教師教育』2019

Vol.6 No.2（2019年7月）、Vol. 7 No.1（2020年3月）発行予定

■SLA（関東）研究会■

代表：佐野富士子

副代表：原田淳・夏莉佐宜

1. 研究テーマ

JACET SLA 研究会では、2018年度も研究会発足以来のテーマ「第二言語習得研究と外国語教育への応用」で研究会活動を行いました。本年度の活動は理論研究だけではなく、2020年問題を見据えて大学入試にも対応できる英語力育成のための公開研修も開催しました。

2. 活動内容

1) JACET 国際大会にてポスター発表

研究会が今まで刊行した書籍3冊（『SLA 研究と外国語教育』2000年 リーベル出版；『文献にみる第二言語習得研究』2015年 開拓社；『第二言語習得研究と英語科教育法』2013年 開拓社）と、最近（2015年～2018年）の活動内容（公開輪読会、公開研究会）を報告。

2) JAAL-in-JACETにてポスター発表

1960年代に研究分野として生まれてから約50年間に発達してきた第二言語習得研究の全領域を図示し、研究が発展してきている領域とこれから発達する領域とを視覚化した。

3) JAAL-in-JACETにて発表

第二言語習得研究の領域に教室における英語習得が含まれていることを示した。その上で、それぞれの領域でどのように研究が発達してきているかを解説し、日本の英語教育へどう取り入れていくかを探った。

4) 2018年度第1回英語教育公開研修会

2020年問題を受け、英語で自分の考えを書く力の育成と、小学校でのリテラシー教育の問題点と課題について、ワークショップ形式で研修会を行った。

日時：2018年9月22日（土）16:00～18:00

場所：常葉大学（草薙キャンパス）

テーマ：ライティング指導

講師：佐野富士子・豊田ひろ子

5) 2018年度第2回英語教育公開研修会

学習指導要領改訂により、高校においても英語で英語の授業を行うことになったことを受け、高校における英語の授業例として、語用論的能力育成を目的としたティームティーチングの例、文法規則を生徒に探させる活動、CLILの指導法を取り入れて生徒の発表を促す取り組み、三角ディベート等の実践例を示し、参加者に体験してもらった。

日時：2018年10月27日（土）15:00～17:00

場所：常葉大学（草薙キャンパス）

テーマ：英語による英語の授業

講師：甲斐順、学生による発表：関根由大・鈴木晴也・古畑晃代、解説：佐野富士子

6) 公開研究会

最近の興味深い論文を持ち寄り、内容について、忌憚のない意見交換をした。

日時：2019年3月16日（土）10:00～12:30

場所：獨協中学高校

テーマ：教室における第二言語習得

3. 今後の活動予定

2019年度も公開研究会、公開研修会を中心に研究テーマを追求していきたいと考えています。

■テスト研究会■

代表：中村優治

1. 研究テーマ

今年度も、昨年度に続き最新の理論を反映しつつ進めてきた「スキル統合型テスト」の作成及び評価方法についての研究を、実践に結びつけることを目指して様々な検証を行った。また、新たにテーマとして加えた「国際共通語としての英語

(EIL, ELF)」を対象とした評価研究活動にも取り込み始めた。今年度は以下3点について主たる活動を行った。

1) 日本の英語教育のための Assessment literacy の一覧表の実践に基づく精緻化

これまで理論的・実践的検証をもとに作成を進めてきた Assessment Literacy の一覧表 (Can-Do リスト) について、2018年度はより具体的かつ多彩な実践研究を通じて問題点を整理・解決しつつ、更なる精緻化を目指した。

2) スキル統合的テストの開発

2017年度に引き続き、スキル統合的能力テスト（特にスピーキングおよびライティングをアウトプットとするもの）の評価項目や基準（ルーブリック）、様々な目的や状況に応じた既存のテストの検証を基に、テスト作成方法について様々な提案をした。

3) 国際共通語としての英語 (EIL, ELF)」の評価のありかた

さまざまな先行研究・各国での実践について調査・議論を行い、日本への適用の可能性について模索した。

2. 活動内容

(1) 上記目標に沿って下記の言語テスト、アセスメントに関する書籍の読書会を行い、各章について、毎月の例会で担当の委員が発表し、ディスカッションを行った。1冊目の図書は EIL/ELF に関連するものである。

・ McKay, S.L. & Brown, J.D. (Eds.) (2016) Teaching and Assessing EIL in Local Contexts around the World. Routledge: New York, USA.

・ Tsagari, D. & Banerjee, J. (Eds.) (2016) Handbook of Second Language Assessment. DeGruyter Mouton: Berlin, Germany.

(2) 評価に関するワークショップを開催し理論と実践の融合を図った。

学部及び大学院で英語科教育法を受講している学生を主たる対象として、9月13日に第11回夏期ワークショップを実施した。現行学習指導要領の目標の一つである「4 技能統合の指導とその評価」をテーマに掲げ、アセスメントの基本的な理論、構成概念、評価法、項目分析に関する講義、モデル授業、参加者によるテスト作成とその批評活動及び評価結果の分析を行った。

(3) 学会発表において研究成果を共有し、分析・議論を深めた。

読書会から得た知見に加えて、国内外のスキル統合型テストの評価方法の分析、毎年開催している上記ワークショップのアンケート分析結果、既存のテストを使った結果の分析などを基に、スキル統合型テスト作成のための Can-do チェックリストの精緻化、評価基準の妥当性、学習者が用いるストラテジー、EIL, ELF への適用などについて学会発表を行った。実践への適用においては、各教員が日々の授業の中でスキル統合型テストを作成できるように、テスト理論の考え方を反映させたテスト作成モデルを構築し、学会発表や夏期ワークショップを通じて参加者と共有した。発表を行った学会は以下のとおりである。

- KATE (関東甲信越英語教育学会) 年次大会 (8月)
- PAAL 国際大会 (8月)
- JASELE (全国英語教育学会) 年次大会 (8月)
- JACET 国際大会 (9月)
- JALT 国際大会 (11月)

特に JACET 国際大会においては昨年に引き続き行った SIG ポスター・セッションにおいて、90年代からのテスト研究会の活動の足跡に加えて最新の研究成果をよりビジュアルな方法で提示したことは、本研究会の活動を多くの会員、参加者に知っていただく貴重な機会となった。

3. 今後の活動予定

1) 現場での使用を目指した Assessment literacy の Can-do リストの作成

これまで行ってきた Assessment Literacy の理論的・実践的検証結果を基に、2019年度は現場で使用できるような Can-do リストを作成し、その改良に向けて更なる実践的研究を積み重ねたい。また、特に Classroom-based Assessment Literacy に焦点を当てて、各教育レベルの教員に対する、授業における評価・測定に関する意識・現状の調査も行っていきたい。

2) スキル統合的テストの開発

2018年度に引き続き、スキル統合的能力テスト(特にスピーキングおよびライティングをアウトプットとするテスト)に必要な評価項目、基準(ルーブリック)、テスト方法などの開発・検証を行う。同時にそれぞれの教育レベルに合わせた代表的なタスク例も開発する予定である。

3) ワークショップ開催

年に1回行っているテストングと評価に関する教員志望者向けワークショップ(第12回)を9月に開催する予定(内容は、スキル統合型テスト作成・結果分析法について)である。

4) 資料集 No.3 の刊行

読書会や発表活動の資料をまとめた小冊子を刊行する予定である。

■ 談話行動研究会 ■

代表：土屋慶子

談話行動研究会では、ジェンダー、文学、日常会話や英語教育など、さまざまな場、文脈でのことばとコミュニケーションの諸相について多様なテーマで研究会を開催しています。今年度も2つの講演会を催し、3月末に大学院生研究発表会を予定しています。

第1回の講演会は5月18日に、Strömstad ア

カデミー（スウェーデン）の Cornelia Ilie 教授をお招きし、“Power and gendering in parliament: Sexist and abusive language in the UK Parliament” というタイトルでご講演をいただきました。イギリス議会での議員間会話データをもとに、議会文化のなかで散見される女性議員に対する性差別的な言動を分析したご研究で、外見への言及など差別発言の特徴とそれに対する女性議員の対抗手段を示すなど、政治の場でのジェンダー問題とその解決の糸口を言語使用の実態から探る、実践的かつ示唆に富んだご講演でした。

第 2 回目は 11 月 9 日に、“A corpus-based approach to present-tense fiction” というタイトルにて、専修大学 池尾玲子教授にご講演いただきました。近現代イギリス小説の語り手が用いる時制の違い（現在時制・過去時制での語り）に注目し、それぞれの時制で書かれた小説をデータベース化した 2 つコーパスを構築、語彙や文法の特徴を比較したご研究についてお話いただきました。近年増えつつある現代時制による語りが採用されている小説では、代名詞や現在進行形などの使用が多く、より日常会話に近い特徴がみられることを示し、その特徴と語り手の視点や登場人物の思考の流れとの関係にも言及した、非常に興味深いご講演でした。

またこの報告書の提出後になりますが、第 3 回目として 3 月 29 日に大学院生による研究発表会を予定しております。杉崎美生氏（日本女子大学大学院 文学研究科英文学専攻博士後期課程）は「話し手はなぜ『なんか』と発話するのか—自己開示場面からの分析—」というタイトルにて、志野文乃氏（早稲田大学大学院教育学研究科 教科教育学専攻博士後期課程）は「Effective Use of Scaffolding in English Lessons in a Japanese Primary School: A Classroom Discourse Analytic Approach」というテーマでのご発表を予定しています。新年度も多彩なテーマで講演会・研究会を開催する予定です。皆様のご参加を

お待ちしております。

■英語辞書研究会■

代表：小室夕里

2018 年度においては、これまで学術的な交流があまりなかった分野、専門家とより広く「辞書」について考えることを活動の中心において研究会を実施した。

1. 「辞書 x LGBT 談話会」

辞書における LGBT に関する語の記述と社会の関係を、辞書学とジェンダー研究の専門家と参加者と一緒に考える会として、2 件の研究発表と参加者とのディスカッションを行った。

日時：2018 年 10 月 4 日（火）19:00～20:45

会場：グローバルカフェ青山店

発表：小室夕里（中央大学）「英語辞書の権威構造：辞書編纂者の意図に反して」～社会が辞書に見出す権威はどのように生まれるのか、LGBT 関連語から考える～・クレア・マリィ（メルボルン大学）「重なり合う用例—20 年経過した『性（意）のあることば』の現在は」～ジェンダー・セクシュアリティの観点から日本語辞書の用例を問う～

2. 「英辞郎」が拓く未来の英語辞書

大学生を含む幅広い層に利用されているオンライン英和・和英辞書データベース「英辞郎」の分析を、辞書学者、翻訳家、制作者それぞれが提示し、参加者との Q&A セッションを行った。

日時：2018 年 12 月 15 日（土）15.00～17.30

会場：早稲田大学 11 号館 4 階 大会議室

Part 1：辞書ではない「英辞郎 on the WEB」を辞書学的に解剖

・小室夕里（中央大学）「英辞郎」はなぜ辞書で

はないのか

・井上亜依（防衛大学校）English Phraseology（英語定型表現研究）の観点から見た「英辞郎 on the WEB」の有用性と発展性

・関山健治（中部大学）電子辞書時代を駆け抜けた「英辞郎 on the WEB」の魅力と課題：検索インターフェイスの観点から

Part 2：「英辞郎」と翻訳者

・高橋聡（日本翻訳連盟理事） 「英辞郎」だけで翻訳はできるのか

Part 3：書籍版『英辞郎』とオンラインサービス「英辞郎 on the WEB」の制作現場

■オーラルコミュニケーション研究会■

代表：塩沢泰子

今年度、オーラル・コミュニケーション研究会（OC研）では、恒例のOCF（OC指導の集大成として、毎年12月に実施する、学生ならびに教員によるドラマやスピーチなどのfestival。順位はつけず、相互に鑑賞し、評価する）に加えて、2014年度に開始し、第5回目となる、学生対象のドラマワークショップ夏合宿を実施した。研究会メンバーの実践や研究成果の一部はJACET年次大会において発表した。7月にAuckland, NZで開催されたドラマ教育学会のIDIERIにおいても発表した。さらに、12月1日に開催されたJAALのポスターセッションにも参加した。

23回目となった今年度のOCFの会場は文教大学であった。参加校は仙台青葉短大、神戸市外大、名古屋外大、同志社女子大、東京工芸大、鶴見大、日大、文教大と全国各地から集まった8校で、創作劇、スピーチ、オーラル・インタープリテーションなど多様なテーマや手法による発表が繰り広げられた。参加者同士の相互評価もなされ、フェスティバルの様子はすべて副代表の野村氏により録画され、参加校に配布された。指導過程や発表作品の趣旨等についても報告書が作成され

る。

9月には塩沢、草薙らによる2泊3日のドラマワークショップ合宿が三浦海岸のホテルで開催され、文教大学、鶴見大学、湘南工科大学、さらに台湾の実践大学の学生約30名が参加した。今年度のワークショップはテーマを「民話をもとにルーツを探る」とし、静止画やインプロなどドラマ手法を活用して学生グループによるミニドラマの創作を最終発表とした。

OC研究会の結束力の原点はOCFであり、このイベントへ向けての日々の授業実践や理論研究と振り返りはOC研究を前進させてやまない。20年以上続くOCFに興味のある方々には動画や報告書の送付が可能なので代表に連絡されたい。2019年度のOCFは同志社女子大学で12月14日（土）に開催予定である。見学を歓迎する。また、2019年8月には教員対象の1泊2日の研修も実施予定である。

■バイリンガリズム研究会■

代表：河野円

副代表：平井清子・鈴木広子

本研究会は、バイリンガリズム理論におけるCALP発達の観点から「EAP教育の開発とその評価」について研究活動を行っている。EAP教育を日本の土壌で大学1～2年生を対象とした、専門教育で必要となるアカデミックな英語力を養成するプログラムと位置付け、「橋渡しプログラム」開発を目指している。

今年度は、学生の学習観、学び方、英語力に対応したEAP教育を目的とした教育モデルの開発とコース設計を目的として、文献研究と学習者調査を行い、その分析結果を受けて教育開発および実践を行った。

1. 理論研究

EAP関連著書と論文を輪読した。特に以下の2

点は詳細にディスカッションを行った。

1. *Introducing English for Academic Purposes*. (2015). Charles, Maggie & Pecorari, Diane

2. Hartshorne, Joshua, Tenenbaum, Joshua, & Pinker, Steven. (2018). A critical period for second language acquisition: Evidence from 2/3 million English speakers, *Cognition*.

前者は EAP 教育の入門書として、コース設計にあたり、どのような注意点が必要かを学んだ。後者はバイリンガリズム、特に言語発達の大規模調査報告であるが、研究手法の有効性から多くの解釈ができるとの意見が出された。

2. 学会発表

2018 年度は活発に成果発表や研究会ポスター展示を行った。JASELE 京都、JACET 国際大会（宮城）、JAAL in JACET、言語教育エキスポにて口頭発表。JACET 国際大会では研究促進委員会開催のミーティングに出席し、他の研究会との交流を行った。JAAL in JACET においては研究会ポスターを展示、JACET 賛助会員との情報交換を行った。

3. EAP ニーズ分析と活動設計

研究会メンバーを中心に、Moodle を使用した学習者対象オンライン・アンケートを 5 月及び 12 月に作成、実施した。調査項目として 1) 学習者の英語力・英語使用経験に関するプロフィール、2) 高校で経験した英語科目の学習活動形態、3) 高校での、英語以外の教科—国語、理科、社会における言語学習形態、4) 英語の必要性について調査を実施した。その結果を分析した上で、大学 1 年生に必要なプログラムの設計を開始し、一部を実施した。

4. 講演会

国際バカロレア (IB) の教員教育プログラムに

ついて 10 月 20 日に公開講演会を実施した。アジアや日本における IB プログラムの最新情報を得ることができた。

なお、研究会は原則として月に 1 度、明治大学中野キャンパスにて行われており、興味のある方は参加歓迎する。詳細の日時や予定については研究会ウェブを照会されたい。

<http://www.jacet-bilingualism.jp/jp/>

■授業学（関東）研究会■

代表：馬場千秋

副代表：林千代

1. 研究テーマ

本研究会は、「大学におけるリメディアル英語授業のあり方」をテーマとしている。少子化、大学全入時代に伴う大学生の学力格差が生じている大学英語教育の現状を踏まえ、学習意欲のない学生や英語を不得意とする学生への対処法とよりよい大学英語授業について探求している。2015 年度より、英語リメディアル教科書の分析を開始し、その結果を発表している。2018 年度からは、「大学英語教員の悩み」について、検討を始めている。

2. 活動内容

- ・2018 年 5 月 19 日（土）
於：カフェミヤマ 渋谷公園通り店
ジョイントセミナー、今後の活動について
- ・2018 年 6 月 23 日（土）
於：カフェミヤマ 渋谷公園通り店
公開講演会、今後の活動について
- ・2018 年 8 月 20 日（月）・21 日（火）・22 日（水）
於：京都府立大学
第 1 回ジョイントセミナーにて、林、馬場が授業学（関東）枠 2 枠でワークショップ実施。馬場が 3 支部合同の授業学シンポジウムのパネリストとして登壇。

- ・2018年8月28日(火)・29日(水)・30日(木)
於：東北学院大学
第57回国際大会での研究会ポスターセッション参加
- ・2018年9月22日(土)
於：カフェミヤマ 渋谷公園通り店
ジョイントセミナー、国際大会報告、
JAAL-in-JACET 学術交流集会での発表、公開
講演会について
- ・2018年10月20日(土)
於：東洋大学8号館7階 125 記念ホール
第2回公開講演会 講演「大学英語授業における
アクティブ・ラーニング」
講師：下山幸成(東洋学園大学教授)
- ・2018年11月10日(土)
於：カフェミヤマ 渋谷公園通り店
JAAL-in-JACET 学術交流集会ポスターセッション
の内容検討、お悩み相談検討
- ・2018年12月1日(土)
於：高千穂大学
第1回JAAL-in-JACET 学術交流集会 ポスター
セッション参加
- ・2018年12月8日(土)
於：マイスペース 秋葉原電気街口店
JAAL-in-JACET 学術交流集会報告、お悩み相
談について、授業学研究大会企画
- ・2019年3月2日(土)
於：帝京科学大学千住キャンパス 2204 教室
第3回公開研究会 講演「英語が苦手な学生を
ひきつけるための教材作成の工夫」
講師：白倉美里(東京学芸大学准教授)

3. 今後の活動予定

2019年度は、教科書執筆計画を継続する。また、英語教員のお悩み相談についても、著書の執筆活動に入る予定である。公開研究会については、2019年度も年1~2回実施し、講演および意見交換会を行い、より良い授業を行っていくための方

策を検討していく予定である。さらに、関東・中部・関西3支部による大会など、合同企画を開始する予定である。

■EAP研究会■

代表：マスワナ紗矢子
副代表：渡寛法・山田浩

EAP研究会は、「国内および海外の大学における学術目的の英語(English for Academic Purposes: EAP)教育カリキュラムの現状把握とニーズ分析」を研究テーマとして発足し、学部・大学院レベルの研究および教育で重要となるEAP教育に関する理論と指導実践の研究を主な目的として活動している。2014年~2017年度は、公益財団法人日本英語検定協会の委託研究を行い、2016年~2017年度は、大学英語教育学会EAP調査研究特別委員会として活動を行った。2018年には「大学英語教育の質保証に向けたEAPカリキュラム実態把握調査」研究成果最終報告書を出版した

(http://www.eiken.or.jp/center_for_research/pdf/bulletin/vol99/vol_99_17.pdfを参照)。

2018年度は、これまでのアンケートおよびインタビュー調査結果の検討と総括を行い、2020年刊行予定の“Towards a New Paradigm for English Language Teaching: Current ESP Perspectives in Asia and Beyond”(Routledge)の一章にその研究成果を発表するために執筆を進めている。昨年度までの研究結果から示唆された、現在の日本のEAP教育で課題となっている体系的なEAP教員養成について、2018年度からEAP研究会メンバーで研究を行っている。日本のEAP教員に求められる資質・技能・知識を明文化することを目的として、まずは研究会メンバーで英国のEAP教員学会BALEAPが作成したCompetency Framework for Teachers of English for Academic Purposes(CFTEAP: EAP

教員コンピテンシー枠組み)を日本語に試訳した。日本の教育環境での適用可能性を一項目ずつ検討し内容を精査した結果、CFTEAPを国内向けの枠組み開発へ発展させることは可能であることが示唆された。今後は、国内のEAPカリキュラム開発・運営責任者やEAP研究者への聞き取り調査を行い、コンピテンシー枠組みを修正・改善していく必要がある。

以上の結果をJACET第57回国際大会(2018年8月30日、東北学院大学)でのポスター発表と第1回JAAL in JACET学術交流集会(2018年12月1日、高千穂大学)での口頭発表とポスター発表、そしてProceedingsでの論文発表を通して公開している。来年度も引き続き、日本におけるEAP教員コンピテンシー枠組み構築に向けて研究を進める予定である。

■学習者要因研究会■

代表：林千代

副代表：吉原令子・岩本典子

1. 研究テーマ

「学習者要因研究会」では、第二言語・外国語学習における様々な「学習者要因」や「個人差」(individual differences)に焦点を当て、研究活動を行っている。特に、学習者の認知・学習スタイル、言語学習ストラテジー、モチベーション、ビリーフなどについて調査・研究を行い、学習者をより多面的に理解し、より効果的な授業及び指導法を提案することを目指している。

2. 活動内容(月例会開催場所は主に東洋大学白山キャンパス)

2018年度は、月例会を開催し、ポスタープレゼンテーション(JACET International Convention、JAAL in JACET)に参加した。詳細を以下に記す。

(1) 4月21日(@武蔵野プレイス)：

①Akiko Kiyota (Tokyo Keizai University): “Tools for teachers as facilitators: Demonstration of 2 Ice-breaker activities, and 1 reflection activity using a mandala narrative frame”, ②Reiko Yoshihara (Nihon University): Reading/Discussion: Second language socialization” (Duff, 2011)

(2) 5月26日：

①Mika Ron (Dokkyo University): “Active learning: A case study in a university writing class”, ②Esther Lovely (University of Queensland): “Benefits of studying the Japanese language in Australia: case stories of young Korean migrants”

(3) 6月23日：

①Akiko Fukao (International Christian University): “The use of reading journals for identifying reading difficulties of EFL learners”, ②Adam Dabrowski (Soka University): “Pedagogical strategies to encourage motivation”

(4) 7月21日：

①Yukako Ueno (International Christian University): “Exploring language-exchange meetings: from a voluntary voordinator's viewpoint”, ②Naoko Monoi (Chiba University) & Jim Elwood (Meiji University): “The art of the cipher: deciphering the I-posture for small learners!”

(5) 8月21日(@Tohoku Gakuin University)：JACET Convention Poster Session

(6) 10月27日：

①Sarah Holland (Toyo University): “Let’s converse about English conversation! (And how to encourage students to do the same)”, ②Misako Kawasaki (Toyo University): “Effectiveness of shadowing and Praat

software for improving intonation”

(7) 11月17日:

Chiyo Hayashi (Kunitachi College of Music):
“Using web-based materials in efl classrooms:
learning english and content from TED talks” ,
“Teaching English pronunciation to music
majors with a web-based platform”

(8) 12月1日 (@高千穂大学) :

JAAL in JACET Poster Presentation

(9) 12月8日:

① Saki Suemori (Ochanomizu University):
“The interaction between teacher motivation
and learner motivation: a study in Japanese
secondary schools” , ②Noriko Iwamoto (Toyo
University): “ Relationship between L2
motivation and L2 motivated behavior of
engineering majors”

(10) 1月26日:

① Eriko Rikuta (Nippon Institute of
Technology): Can undergraduates at a
Japanese technical college develop
metacognitive strategies using a mind-mapping
technique in their English reading task? ②Yih
Yeh Pan (Sanno University): “Facing diversity
in Education”

(11) 3月30日:

昨年度に続き、Web ジャーナル、Journal
of Language Learner Development, No.2 を刊行
した。

支部大会運営委員会からのお知らせ

支部大会運営委員長
新井巧磨 (早稲田大学)

今年の関東支部大会は、7月7日(日)に、東
洋大学白山キャンパスにて開催されます。大会テ
ーマは『Changing Eras & Moving English

Education: Collaborations for Diversity Among
Professional, Governmental and Academic
Fields (時代が変わる・英語教育が変わる—産官
学のダイバーシティへの取り組み—)』です。基
調講演には、内永ゆか子氏 (NPO 法人 J-Win 理
事長) をお迎えし、『グローバル人材の要件と英
語教育』というタイトルのもとでお話しして頂
きます。一方、全体シンポジウムでは、『Latest
Commitment to Diversity and Globalization in
Professional, Governmental and Academic
Fields (産官学のグローバル化・ダイバーシ
ティへの取り組み)』と題し、Kyle Yee 氏 (Vice Senior
Manager, BTB Promotion Office, Group Human
Resources Department, Rakuten, Inc.)、瀧沢佳
宏氏 (東京都教育庁指導部国際教育推進担当課
長)、高橋清隆氏 (東洋大学国際部長) の3名に
ご登壇頂き、お話を伺う予定です。

他に、開催校企画、研究発表や実践報告、賛
助会員である企業の方々による展示に加え、賛
助会員発表もごさいます。支部大会で皆様にお
会いできることを楽しみにしております。

支部紀要編集委員会からのお知らせ

支部紀要編集委員長
伊東弥香 (東海大学)

支部紀要編集委員会では毎年3月末に紀要を
発行しています。現在、2018年度「関東支部紀
要・第6号 (JACET-KANTO Journal Vol 6)」完
成に向けて、校正作業を行っています (2019
年3月発行予定)。会員の皆様には、4月中に
支部大会プログラムと一緒にお届けする予定
です。

第6号には論文1本 “Intelligibility of
Slowed Speech in Indian English” と JACET
関東支部特別研究プロジェクトによる『教員
養成課程コア・カリキュラムの実態調査—大
学教職担当者の見解から—』を掲載して
おります。本号発行にあ

たつては、採択論文を含め、全ての投稿者へ厳しくかつ親身のアドバイスやコメントをお寄せくださった査読者の先生方に多大なご尽力をいただきました。査読者および査読システムに登録してくださった先生方に、心よりお礼を申し上げます。

JACET 関東支部は 2006 年 4 月に誕生しました（清泉女子大学・石田雅近支部長）。現行の紀要（*JACET-Kanto Journal*）は、支部の刊行物である『研究年報（*The Annual Report*）』（～2010 年度）と『学会誌（*JACET-Kanto Journal*）』（2011～2012 年度）を土台とし、第 3 代・木村松雄支部長（青山学院大学）のもと、2013 年度から刊行しています。詳細については、JACET 関東支部創設 10 周年記念誌“Special Issue on the 10th Anniversary of the JACET Kanto Chapter”

（2017）に書かせていただきましたが、支部紀要には大きく 3 つの役目があります。私事、上記 3 誌全てに携わってまいりましたが、2013 年度にゼロからスタートした紀要 6 冊目を発行するに至り、関東支部らしい紀要の形が何とかできたのではないかと僭越ながら考えております。

1) 広く原稿を募集し、支部会員の研究の活性化と質の向上を図る。

2) 既存の記事種別に加え、新たな種別の創設などを通して若手研究者の発掘・育成を試みる。

3) 以上、査読システムを確立することにより、様々な研究分野や研究手法を評価できる人材を確保・育成する。

つきましては、2018 年度任期満了（支部幹事および支部紀要編集委員長）を以て、次の世代にバトンタッチさせていただくことになりました。この場をお借りし、長い間に賜りました皆様のご指導・ご鞭撻、ご協力に対し、深く感謝の意を述べさせていただきます。今回の紀要 6 号発行に際しても、投稿論文の二重投稿疑義の問題などが浮上し、その対応に苦慮するなど、残念ながら、私が紀要編集委員長になってからも、研究倫理に関

する課題・問題に直面することが多々ありました。また、大学英語教育の将来・未来像についても、教育・教育現場に関わる全ての人々による共通理解を図ることはとても難しいと感じています。そのような意味を含めて、これからの関東支部、ひいては紀要が支部会員同士をつなぐ研究の場・機会を提供し続けることを希望しております。また、末筆になりますが、皆様お一人一人のますますの発展を祈念いたします。

紀要編集委員会メンバー：伊東弥香（委員長）、今井光子（副委員長）、大野秀樹、奥切恵（副委員長）、小田眞幸、熊澤孝昭、鈴木健太郎、武田礼子、多田豪、濱田彰、古家貴雄、Chad Godfrey、Paul McBride（敬称略、50 音順）

事務局だより

支部事務局幹事

高木亜希子（青山学院大学）

■支部講演会、JACET 関東支部・東洋大学共催講演会及び開催のお知らせ■

下記のとおり、支部講演会及び共催講演会を実施いたします。多くの皆さまの参加をお待ちしております。詳細は支部 HP、支部会員 ML でお知らせいたします。

(1) 2019 年度 4 月～9 月の開催予定

2019 年度第 1 回 JACET 関東支部・東洋大学共催講演会

日時：2019 年 4 月 13 日（土）16:00～17:30

2019 年度 JACET 関東支部講演会（5 月）

日時：2019 年 5 月 11 日（土）16:00～17:20

2019 年度 JACET 関東支部講演会（6 月）

日時：2019 年 6 月 8 日（土）16:00～17:20

2019 年度第 2 回 JACET 関東支部・東洋大学共催講演会

日時：2019 年 9 月 14 日（土）16:00～17:30

■住所変更届提出のお願い■

支部会員の皆様に、支部大会のご案内や支部紀要を確実にお届けするために、転居の際には、**JACET 本部事務局**へ住所変更届けを提出してくださいよう、どうぞよろしくお願いたします。

***JACET-Kanto Newsletter* 第12号**

発行日：2019年3月31日

発行者：JACET 関東支部（支部長 木村松雄）

編集者：佐野富士子、下山幸成

齋藤早苗、川口恵子、長田恵理

発行所：〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25

青山学院大学文学部英米文学科

木村 松雄 研究室内